写真15：閉鎖された企業立の「西日本旅客鉄道株式会社　広島鉄道病院」。

写真16：新設独立した「医療法人　JR広島病院」。日本の病院黎明期、重厚長大産業の大企業が企業城下町に職域病院を建ててまず従業員とその家族の健康を確保した。余力があれば町の住民の診療も行った。立派な行為だ。しかし国公立病院や民間病院が拡充してきたのに逆相関して、企業立病院の数はドンドン減っていった。大企業が地域の医療を支えるスタイルは終焉したようだ。

■ 世界の「医療列車」

最後に古今・東西の「医療列車」につき、今までに知り得た知見を簡潔に紹介しておきたい。地上に建物が立っている鉄道病院ではなく、レール上の車両が診療所や病院になって移動する医療施設の話である。移動する病院船の列車版だと捉えて良い。「病院列車」「汽車病院」「医療列車」など様々な表現がされている。ここでは「医療列車」で統一する。

＜帝政ロシア・ソビエト連邦＞

最も古い医療列車は帝政時代のロシアで走っていたようだ。アレクサンドルI世皇后マリア・フョードロヴナはクリミア戦争（1853～1856年）の時、医療列車を2両寄附している。すなわち160年以上前の帝政ロシアでは、鉄道を利用した医療列車が既に走ってしていたことになる。因みに新橋―横浜間の鉄道開通は1872年（明治5年）である。ロシアの国土面積は地球の陸地の1/8にも及ぶ。モスクワから極東のハバロフスクを繋ぐ大陸横断鉄道（シベリア鉄道）を敷設させ、日露戦争の最中の1904年9月に全線開通した（その後不凍港のウラジオストックまで延長。全長9,297km）。

鉄道沿線には12病院、4,500床のベッドがあった。しかし、それだけでは医療需要に対応できなかった。1918年頃、ソビエト連邦はシベリア鉄道やその支線に「医療列車」を運航させる。これは、列車内に入院用病室を装備するきちんとした「病院」である。「汽車病院」の方が正確な表現になる。汽車病院は車中にベッド200床を備え、浄水タンクやボイラー、消毒設備、衣類を積んで、沿線の町を訪問し、治療や伝染病防止活動を行っている。住民は最初に入浴して、新しい衣服の支給を受けたようである。医療と教育は無料で国民に等しく提供されることが、当時の社会主義国における国是であった（ただし、提供出来た医療や教育の量や質は別の話である）。4軸の医療用車両（1931年製）の写真が残っている。

＜関東州・満州＞

関東州（かんとうしゅう）とは中国の遼東半島の突端部、すなわち大連、旅順地域である。満州国とは別の国であった。日本（関東軍）は満州事変当時の北満で重症患者、伝染病、精神病患者の搬送に医療列車を使用している。医療列車の車内は、病室、薬室、手術室、消毒室、滅菌室、包厨室、倉庫に区分され、列車の側面と屋蓋には赤十字が表示されていた。患者の多寡によって特別編成になったり、一般の列車の末尾に連結されたりしている。

＜日本＞

日本の本土でも戦前には「病客車」という車両が走っていた。ベッドはついているが病人搬送が目的の車両であり、ソビエト連邦の汽車病院のように入院加療を行う車両ではない。病客車には赤十字が表示され、各地の軍港、軍隊病院近隣から発車する列車に、併結もしくは専用編成がなされて運行された。病客車が搬送したのは傷病兵と遺体である。病客車は精神を患った軍人搬送時の保護室としても使用された。またハンセン病患者の療養所への移動にも使用された。敗戦時には60車両が残っていた。朝鮮戦争の時に復活し、負傷した国連軍の負傷兵をGHQが指示する日本各地の病院へ輸送した。

なお、現在の日本には医療関係の車両は走っていない。病人が出ると車内放送で医師に協力依頼をしたり、最寄りの駅に緊急停車したりする。九州新幹線は患者搬送サービスを行っている。これは列車の個室を患者搬送に転用するもので「ドクタートレイン」と呼んでいる。ストレッチャーや酸素ボンベなどの医療機器を持ちこむことも出来る。医師や看護師が必ず同伴する。追加料金はないが、原則2日前までの予約が必要。

現在の医療列車は、私が知る限りでは①南アフリカ、②ロシア、③インド、④キューバで運行されている。いずれも医療専用列車に医療者と診療機器・材料を積んで、医療施設のない僻地を定期巡回するスタイルだ。もちろん医療機関である。しかし入院設備はなく診療所の機能となる。

＜南アフリカ＞

南アフリカ共和国では、反アパルトヘイト組織によって“phelophepa（ピロペパ号、清潔で健康という意味）”という医療列車が運行されている。1年の内9か月間を医療列車として巡回する。1,600kmの沿線の各駅で、眼科・歯科を中心とする医療チームが貧しい人々に医療を提供している。

＜ロシア＞

現在、バイカル湖とアムール川を結ぶ第二シベリア鉄道（バイカル・アムール鉄道、全長4,300km）を医療列車「マトベイ・ムドロフ号」が巡回している。ソビエト連邦崩壊後、沿線の国家開発プロジェクトは中止され、この路線はシベリアのへき地となった。冬は氷点下50度になる。医療列車は国営ロシア鉄道が運行している。診察室と医療機器を装備し、12～13人の医療スタッフが乗務する。医療スタッフの住居はハバロフスクにあり、2週間程度の巡回診療を年10回ほど行っている。1回の走行距離は数千kmになる。立ち寄る数十の寒村には近くに病院がない。年2回のペースで1日停車して診療を行う。医療提供は検査と診察だけで、列車内で手術や入院は出来ない。検査は血液、尿成分、心電図、脳波、超音波、X線である。医師は検査結果を診て診断を下し、治療法と薬の指示を行う。ロシアは医薬分業である。車内での医療費は国が負担している。医療専用列車にはスタッフ用の食堂車、寝台車が連結されており、スタッフの居住空間となっている。

＜インド＞

1991年から医療列車「ライフライン急行」がインド国鉄とImpact India財団によって運行されている。列車は5両編成で、同時に5人の患者の手術を行なえる2つの手術室、回復室、滅菌室、スタッフの居住車両がある。1回の巡回は約1か月間で、医師はボランティアで1週間ごとに交代する。内外15万人の医師がボランティアとして支援する。医療列車を支えている医師の数が凄い（因みに日本の医師数は32万人、:歯科医師数11万人）。財団は寄附を募り、列車内の医療は無料である。外科手術（視力・運動能力・聴力回復など）や、口唇裂、てんかん、歯科の治療や予防指導などの医療サービスを提供している。

＜キューバ＞

人口1,148万人のキューバは人口あたり医師数が世界第2位（第1位はカタール。人口275万人）で、日本の約3倍も医師がいる国だ。医師はブラジルのへき地に出稼ぎに行く。そのような医師が溢れている国にも医療列車があった。青色ボディに白帯をつけ、“COCHE MEDICO（スペイン語で「医者車両」）”と表記された医療車両の写真を見たことがある。おそらく1両しかないのだと思われる。ところが2018年2月1日のキューバの記事に、走ってきた10 両編成の貨物列車が停車中の車両に衝突し、衝突で飛ばされた車両が駅舎に突き刺さっている写真が掲載されていた。その写真をよく見ると青色ボディと白帯の車両で“COCHE MEDICO”の文字があった。以前に見た写真を思い出した。医療列車を運航している国は一つ減ったようだ。